

市史だよ!

Gačiがちまやあ

創刊号・2004年6月10日(木)発行

年4回(5・8・11・2月発行)

問い合わせ・情報提供先

☎ * (* ☎ * ☎

☎ (098)893-4431

Fax (098)893-4434

編集・宜野湾市教育委員会文化課 市史編集係

〒901-2710 宜野湾市野嵩1-1-2

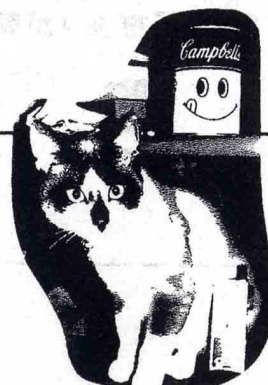
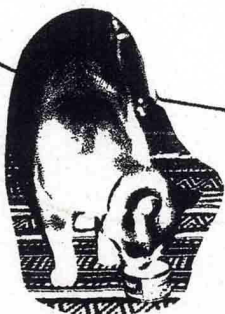
Kyoiku08@ami.city.ginowan.okinawa.jp

創刊にあたって

わたし達の身の回りには、さまざまな物や出来事があり、それは過去から長い時間を経て現在に至ることや、新たに生まれ未来へと進むものもあります。自然環境も同じように長い時間と変化を経て今日に至っています。このようにみると、わたし達の生活や環境の変化は著しいもので、これら身の回りの物事に気を配ってみると、そこには先人達から受け継がれてきた習慣や知恵、伝統が秘められていることに気付かされます。先人達の教えや過ちを振り返って再認識し、地域の歴史文化を記録し理解することは、現在のわたし達、そして未来を担う子ども達へのメッセージとなり、これからの宜野湾市を考えるきっかけにもなると思います。

わたし達の足もと(地域)には、話題が豊富です。今回、この「がちまやあ」の刊行は市民のみなさんに、歴史・文化・自然を通して、日頃気付きにくい街の話題を紹介します。タイトルの「がちまやあ」は、沖縄の方言で食いしん坊を意味します。市民のみなさんが宜野湾の歴史・文化・自然情報の食いしん坊(がちまやあ)になって、お腹いっぱいになってほしい、との願いを込めて決めました。また、我々・市史編集係のメンバーも「がちまやあ」となって、ハングリー精神をもち、ますます調査や資料収集に励みたいと考えています。市民のみなさんからの情報提供もお待ちしておりますので、よろしく

お願いします。



「市史」ってなんだろう？

市民のみなさん、「市史」って耳にしたことがありますか？市史とは市の歴史・文化・自然についてまとめた本のことです。この市史を作るには市民のみなさんの協力が不可欠です。いにしへの宜野湾、現在の宜野湾を知るために、各地域を歩いて拝所や湧き水、自然等の確認調査を行い、ときには昔の宜野湾市の様子を知る先輩から^{あご}字の習慣や行事、民話、戦争体験などのお話を聞かせていただきます。また、昔の写真や日誌(記)、手帳なども、その当時を物語る歴史資料として集めています。このように幅広い分野を扱い、これらをテーマ毎にまとめたものが市史になるのです。

★市史・報告書の刊行までの流れ

- ① テーマに合わせて目的・専門の先生に協力依頼・調査内容など、刊行までの計画を立てます。



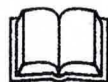
- ② 自治会や郷友会、関係者に調査の協力をお願いします。そして先生方とわたし達事務局とで地域の古老からお話をうかがいます。また、市内外の図書館や博物館、公文書館など、関連市町村を訪ね、宜野湾市の関係する文書や写真、新聞などの資料を集める調査をします。聞き取り調査や資料収集調査には2～3年かけます。



- ③ 調査結果を基に先生方と話し合いをして、原稿の執筆をお願いします。事務局は先生方の手助けをしたり、ときには原稿を書きます。原稿が書き上がると、誤字や脱字、内容に誤りがないかを確認します。また写真や図表を割付けし、本全体を仕上げていきます。



- ④ 印刷屋さんと③に記した作業を2～3回繰り返します。最終確認が終わると印刷・製本を経て、「市史」が完成します。



宜野湾市では、1979(昭和54)年から『宜野湾市史』として編集事業が始まりました。現在は戦後の宜野湾市と綱引き行事について調べています。このような事業は、沖縄県内で県や各市町村合わせて30余の機関で取り組んでいます。

最近は「字誌」として字独自で歴史文化をまとめる動きもあり、市民の地域への関心の高さが感じられます。市内では、字宜野湾の『ぎのわん—字宜野湾郷友会誌』、新城の『新城誌』がすでに刊行され、計画中的の字もあります。もし、自治会や郷友会で字誌の編さんを計画し、歴史資料の収集や編さん方法でお困りの点がございましたら、市史編集係までご相談ください。



市史にはいろいろなテーマがあります。ご利用下さい！

『宜野湾市史』第一巻 通史編

『写真集 ぎのわん』

『宜野湾市史』第二巻 新聞集成 I

『ぎのわん市の戦跡』

『宜野湾市史』第三巻 市民の戦争体験記録

『戦後初期の宜野湾—桃原亀郎日記』

『宜野湾市史』第四巻 文献資料

『佐喜真興英 生誕百年記念事業報告書』

『宜野湾市史』第五巻 民俗

『ぎのわんの針突』

『宜野湾市史』第六巻 新聞集成 II

『ぎのわんの西海岸』

『宜野湾市史』第七巻上 新聞集成 III

『野嵩マールアシビ・組踊 宜野湾敵討』

『宜野湾市史』第七巻下 新聞集成 III

『村芝居—ぎのわんのムラアシビ』

『宜野湾市史』第九巻 自然

『宜野湾市(村)報縮刷版』第1~4集

『ぎのわん自然ガイド』

『自然とヒト』

●シリーズ①歴史の道

宜野湾並松街道

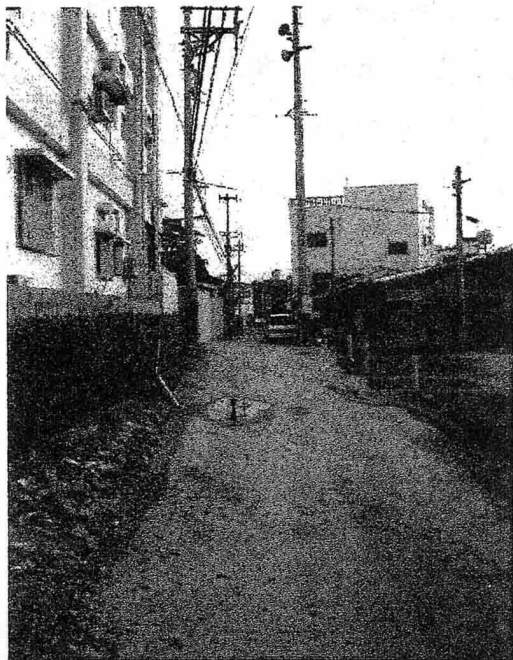


写真 ① 普天間神宮寺前の道

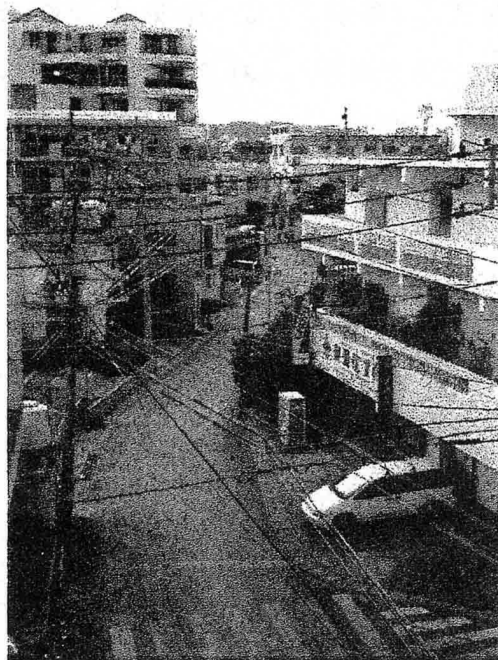


写真 ② 真栄原一丁目内に残る街道跡

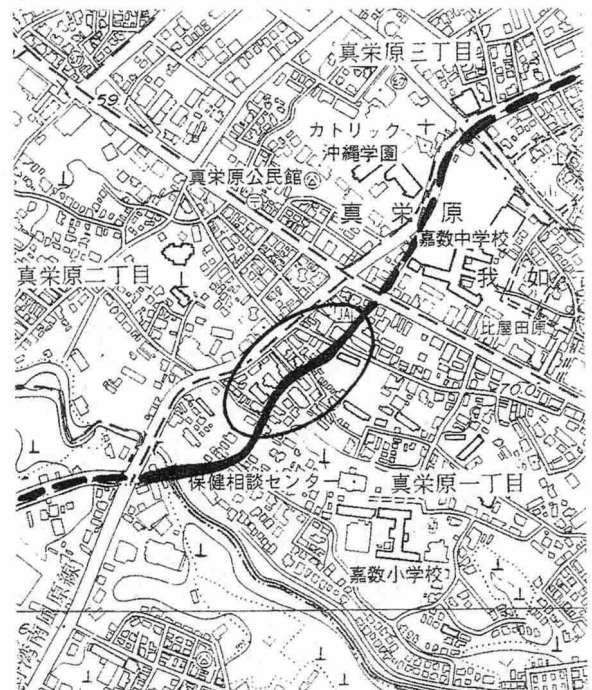
この2枚の写真は、戦前、ジノーンナンマチ、ジノーンマーチャーバー、ジノーンマーチューと呼ばれた琉球松並木の街道跡です。この街道は、宜野湾市内の嘉数から現在の普天間飛行場を通り、普天間まで通っていました。琉球王府時代には国王が“普天間参詣”と称してこの街道を通り、普天間宮にお参りに行きました。1932(昭和7)年には国の天然記念物の指定を受け、当時の記録をみると2,944本の松があったようです。道の両脇に茂る木々は木陰になって涼しかったそうです。また、人びとは落ち葉をタムン(薪)として使い、お盆のウンケー(お迎えの日)には松の根元を少し削り、門に供えて祖先をお迎えするウンケーピー(お迎え火)に使った人もいました。

しかし並松は、^{ナンマチ}沖縄戦で米軍や日本軍による伐採、米軍の普天間飛行場建設で大半を失いました。戦後は1950年代半ばまで普天間商店街や真栄原の嘉数中学校前に、一部残っていましたが、松食い虫や都市計画の影響を受けてなくなりました。その後、かつての街道跡だけが残りましたが街の変化に伴い、今やその姿もわかりにくくなりました。

写真①は普天間神宮寺前の道で、かつては旧普天間集落（現在はキャンプ・瑞慶覧内）へ続く道でした。写真②は、真栄原一丁目内の真栄原十字路の近くにある通りです。今では、周囲の建物に囲まれて面影もなくなりましたが、かつては琉球国王も通った、宜野湾を代表する道なのです。



戦前、国指定天然記念物に指定された宜野湾並松
（普天間）



普天間神宮寺前の街道跡（左）と真栄原一丁目内の街道跡（右）



～戦後宜野湾村政の復活～

行政資料とは何でしょう？ひょっとしたらあまり聞き慣れない言葉かもしれません。県庁や市役所といった行政機関では日々、文書(写真・図面なども含む)が作成されています。作成された当初は、資料としての価値をみることが出来ません。しかし、その中には時間を経ることによって、「史料」としての魅力を放つものもあります。行政資料とは、いわば歴史をひも解く鍵となるものです。

このコラムでは、行政資料を読みながら、戦後の宜野湾の様相について探ってみたいと思います。今回は、収容所の人びとの「帰村」と、宜野湾村政の復活について考えてみましょう。

戦後間もない沖縄諸島の地方行政制度は、1945(昭和20)年9月「地方行政緊急措置要項」によって、各地の収容所を中心に、16の行政区から編成されていました。現在の宜野湾市域は「胡差地区」に編入されていました。25歳以上の男女には選挙権が与えられ、市長選挙も実施されます。食糧や衣類などの物資は米軍から無償で配給されており、収容所の人びとは簡単な軍労務に従事していました。しかし、芋堀りに出かける人や、米軍の残飯をあさる人も多く、配給される食糧は人びとの需要を満たすほどのものではなかったと思われます。また夜になると、敗残兵と化した日本兵が食糧を強奪するなど、収容所での生活は危険を伴うものでした。そのため、夜間の外出や居住区外への通行は禁じられており、人びとの生活は制限されていました。

1945年10月になると、各地収容所住民の「帰村」が許可されます。「帰村」が許可されるにしたがって、収容所を中心にした先ほどの行政区はその機能を失い始めます。1946(昭和21)年には、戦前の市町村制が復活しました。戦後初代の宜野湾村長には、終戦時の村長であった久保田盛春が任命されました。村政委員も戦前の村会議員の現存者たちが任命されました。戦前の市町村制の復活は、人びとになじみのある行政システムであると同時に、米軍政の目的に合致した「政治復興」でもありました。

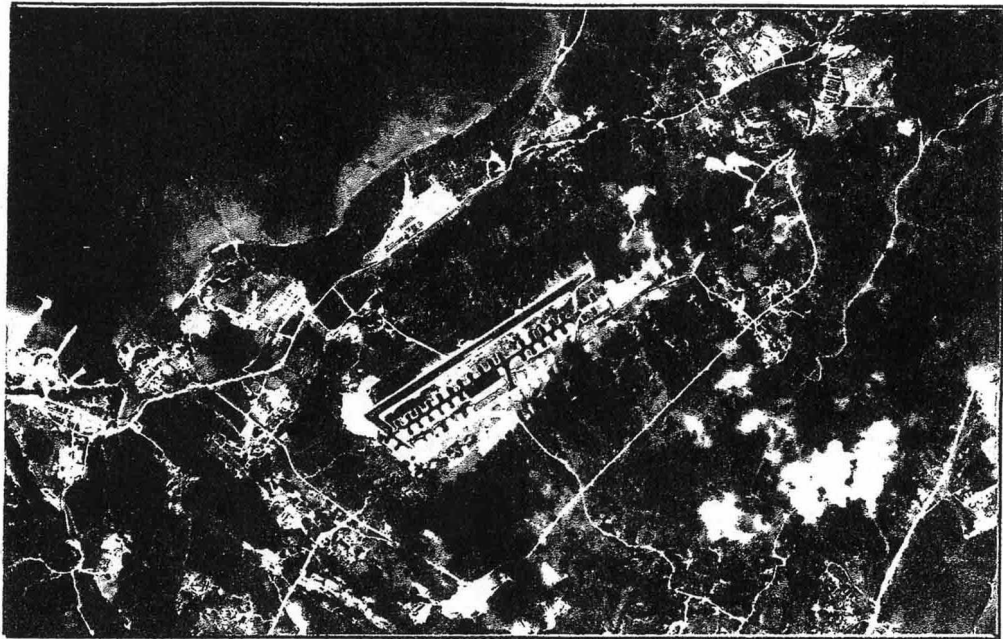
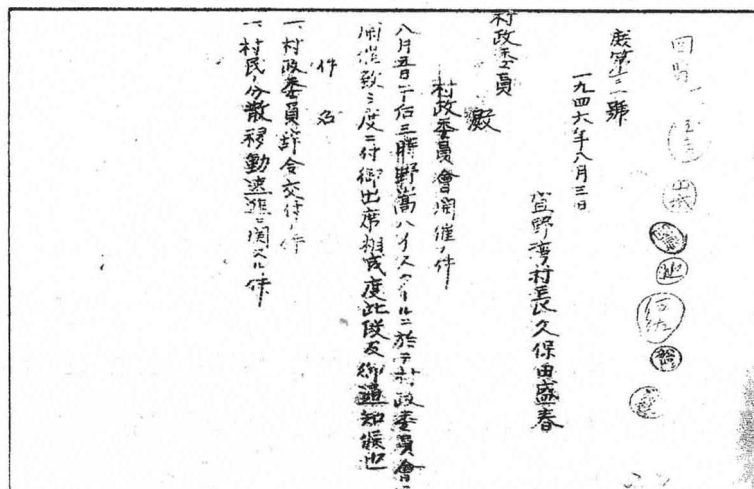


写真1 … 1945（昭和20）年12月 宜野湾上空 『写真集ぎのわん』より

一方で、占領と同時に米軍は軍事基地を建設しており、島尻・中頭地区の耕地のほとんどが陣地と化している状況でした。宜野湾も例外ではありません。写真資料からも普天間飛行場の滑走路がはっきりとうかがえます（写真1）。したがって、人びとは必ずしも旧居住地へと戻れたわけではありません。人びとの「帰村」は米軍基地の存在に大きくほんろうされます。

以下は村政委員会開催に関する行政文書です（資料1）。この文書は村政委員辞令交付を伝えるとともに、当時の宜野湾村政が「村民ノ分散移動速進」（「促進」の誤字と思われます）といった行政課題を抱えていたことをうかがわせます。人びとは各地の収容所から宜野湾村へと戻ったものの、野嵩収容所での生活を余儀なくされてきました。戦後宜野湾村における人々の生活は野嵩収容所から始まったのです。



資料1 … 1946年8月3日、宜野湾村長・久保田盛春から村政委員へと
 通達された文書。野嵩ハイスクールでの村政委員会の開催を伝えている。

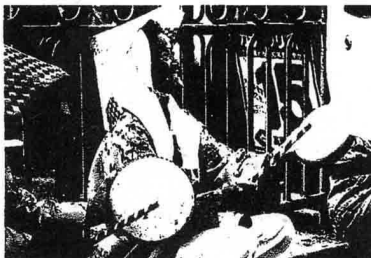


♪ もーち ちなひかりり ♪



宜野湾市内の綱引き行事というと、現在では大山や真志喜の大綱引きが知られていますが、戦前は、市内の旧 14 字のほとんどで、旧暦 6 月中に引き行事が行われていたといえます。残念ながら、沖縄戦を境に綱引き行事が行われなくなったところが多く、ワラから縄をなったり綱を打ったりして大きな綱を作り上げ、その綱を地域の人びとが集まって引き合うような綱引きは、市内では大山と真志喜を残すのみとなってしまいました。規模の大小はともかく、かつてはあちこちで綱引きが開催され、それに伴う道ジュネーや旗頭など、賑やかに行われていた様子を想像すると、それだけでワクワクしませんか？

ところで、タイトルになっている「もーち ちなひかりり」ですが、これは綱引き歌の一節から取りました。「早く出て来て、綱を引いて下さい」という意味の歌詞の部分です。戦前の綱引き行事では、綱引き歌は欠かせないものでした。応援歌のような役割を果たしていたと言えるでしょう。相手側を皮肉ったり、味方を称え上げたりしている歌詞もありますが、その内容は微笑ましくすら思えます。



綱引き前の道ジュネーにて（大山・1994年）



野嵩ちなひちもういの道ジュネー（2003年）

たとえば「〈後組・前組〉の嫁になってもいいが、綱引きの日になると、心変わりするものよ」（大山）とか、「〈西組・東組〉のご飯を食べて、〈東組・西組〉に味方する者は、臭いぞうりを選んで、こすりつけてやりましょう」（我如古、他）、また「〈前組・後組〉の大綱は、人数が少ないので、持ち上げても綱尻が下がる。〈後組・前組〉の大綱は、多人数で揃って持ち上げ、りっぱなものよ。」（宜野湾、他）といった内容の歌詞がありますが、そういった歌詞の後に「東組の娘たちも、西組の娘たちも、互いに仲直りして、遊んで別れましょう。」（嘉数・他）という内容も歌われていて、なんだか、ほのぼのとした気持ちにさせられます。

戦前の綱引きや綱引き歌の情景を思い浮かべながら、今年の旧暦六月は、皆さんも、ぜひ「もーち ちなひかりり」♪

* 今年度の大山大綱引き、および真志喜大綱引きの開催日は8月1日(日)です。